

# 種苗管理センターニュース

Center for Seeds and Seedlings, NARO

第 88 号



ばれいしょウイルスフリー発祥の地～嬭恋農場～  
(本文3ページをご覧ください)

- 巻頭言 “生産連携部長就任のご挨拶”
- 農場便り 嬭恋農場
- 特集 【若手調査員に聞く】～いま何してる？～
- トピックス 新型コロナウイルス対策（北海道中央農場）  
UPOV 第 54 回野菜作業部会（TWV）に参加して
- 「ギャラリー」

## 農研機構 種苗管理センター

「農研機構」は、国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構のコミュニケーションネームです。

## 生産連携部長就任のご挨拶



4月1日付けで農研機構種苗管理センター生産連携部長を拝命いたしました。

農研機構種苗管理センターは、我が国の食料自給率の向上、植物新品種の保護・活用と優良な種苗の流通確保を行うために、「種苗の管理に関する総合機関」として着実に業務を実施してまいりました。

その任務の一端として、我が国の畑作振興上、重要な基幹作物であるばれいしょ及びさとうきびの原原種の生産及び配布を行っています。ばれいしょ及びさとうきび

は栄養繁殖性植物で増殖率も低く、病害虫にも弱いことから健全無病の種苗は生産上最も重要な資材となっております。

令和元年度、当センターでは北海道農業研究センターで選定したジャガイモシロシストセンチウ抵抗性品種「フリア」を北海道道庁の要望に応じて1年短縮し配布を行ったところです。ジャガイモシロシストセンチウは、南米原産の世界的な害虫でばれいしょ等のナス科植物に寄生し、特にばれいしょ生産において被害を及ぼすことが知られています。平成27年に北海道網走市内の一部のほ場において、ジャガイモシロシストセンチウが我が国で初めて確認され、平成28年より植物防疫法に基づく緊急防除によるまん延防止が開始されているところであり、抵抗性品種の普及が有効な防除策とされております。

また、さとうきびにおいては九州沖縄農業研究センターで育成された新品種「はるのおうぎ」を鹿児島県の要望に応じて通常より2年短縮して令和2年春植用原原種から配布を開始しました。新品種「はるのおうぎ」は種子島における春植えで約3割、株出しで5割以上収量が高く、多回株出し可能な特徴があります。また、倒れにくいいため機械収穫しやすく、機械収穫後の萌芽も良好なことから株出しの収量が減少傾向にある種子島において、収量回復の起爆剤として期待されています。

このように昨年度も農研機構で開発された新品種の社会実装に、当センターの保有する技術で無病化された苗の早期普及を行うことで貢献してまいりました。引き続き、種苗管理センターが現場の皆様のお役に立てるよう業務を遂行していく所存でありますので、今後ともご指導、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構  
種苗管理センター生産連携部長

中里 工

## 農場便り 【孀恋農場】



孀恋農場は群馬県の西部に位置する吾妻郡孀恋村にあります。孀恋村は浅間山をはじめ四阿山(あずまやさん)、草津白根山等の標高 2 千メートル以上の高峰に囲まれた高原(標高約 700m〜)です。村名の由来は日本武尊が碓日坂(今の鳥居峠)にお立ちになり、亡き妻を追慕のあまり「吾孀者耶(あづまはや)」(ああ、わが妻よ、恋しい)とお嘆きになって妻をいとおしまれたという故事にちなんで孀恋村と名付けられました(孀恋村誌より)。高冷地に位置する孀恋村は、立地条件を生かし夏秋玉菜(キャベツ)の産地として50年連続で全国一位の出荷量(令和元年度は5割以上)を保持しています。



玉菜畑に囲まれた孀恋農場

孀恋農場は、孀恋村の中でも標高が高い約 1,200m〜1,350m のところにあります。令和元年の気候は平均気温 8.1℃、最高気温 29.9℃、最低気温-12.3℃、年間降水量 1,888mm、年間日

照時間 1,886 時間と過ごしやすい気候の中ではばれいしょ原原種生産配布業務及び遺伝資源作物の保存業務を行っています。

ばれいしょは野菜の種子と違い増殖率が低く、また、病気に罹った種いもを使用すると収量が大きく落ち込むため健全無病の種いもを供給することが重要です。我が国では増殖体系(原原種→原種→採種→一般栽培)が整備され種いもが供給されています。種苗管理センターでは大元となる原原種の供給を行っています。孀恋農場では、健全無病の原原種を生産するため、試験管で育てられた無病の培養苗を温室で養液栽培により 10g ぐらいの小さい(ミニチューバー)を生産し、そのミニチューバーを元だねとして、ほ場(畑)で2作行います。ほ場は約 107ha(東京ドーム約 23 個分)と広く、土壌病害を防止するため5年輪作体系をとっています。令和2年度は 19 品種 3,673 袋(20kg)の原原種を生産し九州、中国地方を中心に配布を予定しています。



ミニチューバー

また、遺伝資源センターとの連携によるジーンバンク事業として、栄養繁殖性のばれいしょ 1,747 品種・系統の保存増殖及び種子繁殖性のとうもろこし、とうがらし類の種子の再増殖を行っています。作物基礎データを蓄積するため栄養体や種子再増殖作物の特性調査も実施しています。

(孀恋農場長 山崎春男)

## 特集【若手調査員に聞く】～いま何してる？～

87号に引き続き、平成30年度に採用された調査員に「いま何してる？」と聞きました。

…いま何してる？… 雲仙：辺田 結巳 調査員



トラクター作業中に

雲仙農場業務部の辺田です。平成30年に採用され本所で3か月間の研修ののち、同年7月から雲仙農場に配属となりました。

雲仙農場では主に栽培試験、原原種生産（ばれいしょ）、遺伝資源保存業務を行っています。長崎県島原半島の標高約300m地点に位置し、ほ場から有明海が一望できる見晴らしの良いところにあります。まれにですが冬に積雪が見られることもあり、初めて真っ白になった農場を見たときは九州でも雪が降るの！？ととても驚きました。

### 担当業務について

現在は種苗生産チームにて原原種生産業務に携わっています。健全無病な種いもの安定供

給のため、国内では3段階（原原種→原種→採種）にわたる種ばれいしょの増殖体系が整備されており、種苗管理センターでは原原種までの生産を行っています。雲仙農場の原原種出荷袋数は約2,000袋と他農場の3,000～20,000袋に比べて規模が小さくなりますが、西日本を中心とする暖地二期作地帯へ向けた秋植用原

原種の生産を担っています。他地域の原原種生産農場とは栽培時期が異なり、種いもの植付けは1月中旬頃から行います。他の農場でちょう



4月のほ場の様子

ど植付けが始まる5月には収穫を迎え、二度の選別作業を経て順次出荷されていきます。出荷

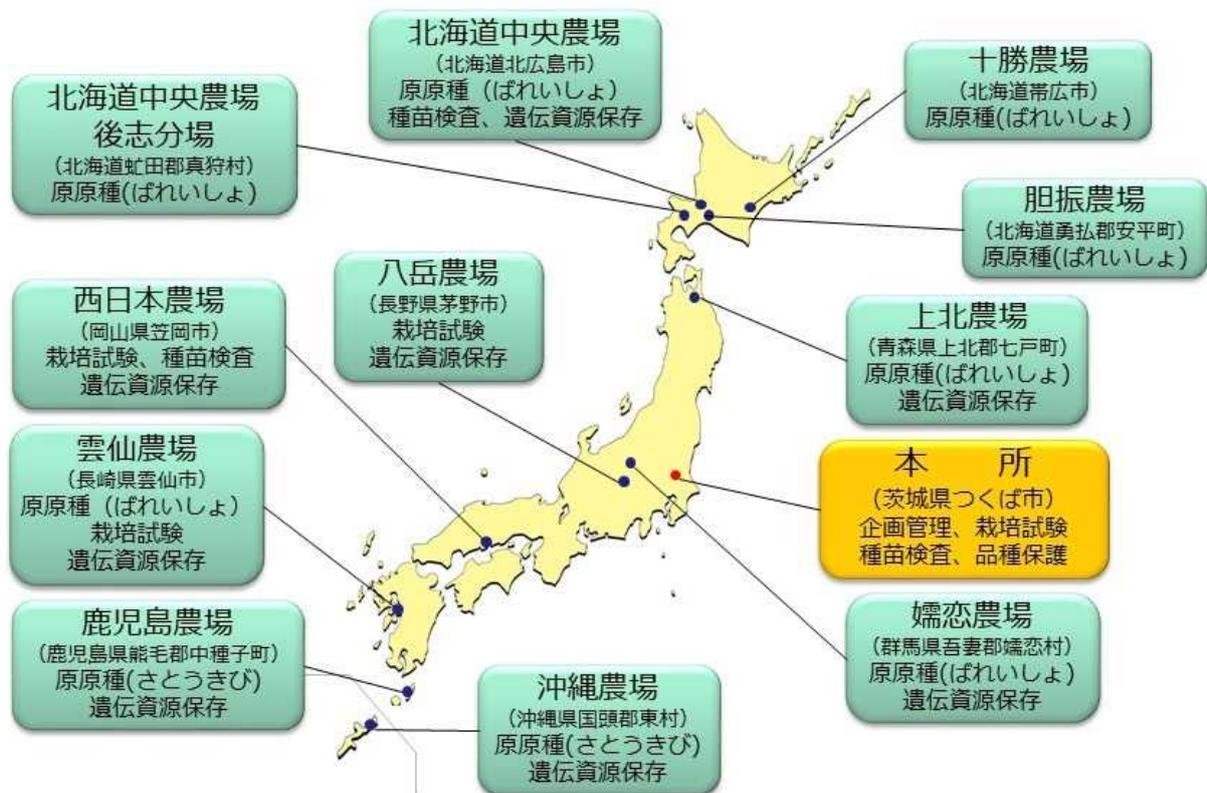
された原原種は同年秋にすぐ植え付けることになるため、雲仙農場では種いもの病害検定を出荷先の原種秋作栽培と同時期に進めることとなります。

当農場の種苗生産チームは、他の農場のように生産、検定など業務ごとに細分化されておらず、原原種生産から輪作ほ場の管理まで全ての業務をチームで協力して進めています。学生時代はラボワークが中心だったためほ場での作業はとても新鮮でやりがいがあります。ありがたいことに、これまでに幾つか運転・作業資格を取得させていただいたので、少しずつですがトラクターやフォークリフトの作業も、指導を受けながら行っています。種ばれいしょの収穫時には、低床トレーラー付きのトラクターを運転し、ミニコンテナに集めた種いもの回収を担当しました。が、自分の運転技術の未熟さもさ

ることながら、他の作業機が複数稼働しているほ場内で自分の動線を意識して動くことができず、余分に手間をかけさせてしまい申し訳なさでいっぱいでした。現在の種苗生産チームは私を除いて皆ベテランの方ばかりなので、その技術や知識を一つでも多く身につけていけるよう努力しなければと常々感じています。

### これからについて

雲仙農場は微量測定機器を扱う検定業務から大型トラクターの運転まで多種多様な仕事に携われる良い場所だと思うので、機会を逃さずに幅広く経験を積んでいきたいです。慣れないうちは与えられたものをこなすことで精一杯でしたが、今後は業務をより効率よく進めるために何が必要かを考えて工夫できるよう努めていきたいと思います。



…いま何してる?… 沖縄：稲葉 彩花 調査員



網室からのさとうきびの刈り出し

沖縄農場業務部の稲葉です。平成 30 年 4 月に採用され、つくば本所での研修を経て、同年の 7 月から現在まで沖縄農場に勤務しています。

沖縄農場は、本島北部の東村にあります。名護市街地から約 30 km、那覇空港から約 100 km に位置し、「やんばるの森」と「サンゴ礁の海」に囲まれた自然豊かな環境です。晴れた夜には満天の星を見ることができます。

ここでは、私がこれまで携わってきた「遺伝資源植物の保存・増殖」と「さとうきびの原原種生産」の 2 つの業務について紹介します。

### 業務について

着任から一年半は遺伝資源チームにて、パイナップルやさとうきび等の熱帯・亜熱帯性植物を中心とした約 1,300 点の栽培管理や、にがうりの種子再増殖を行いました。保存している植物には野生種等があり、新品種育成等の研究の素材として使われることもあります。遺伝資源は、一度失われると二度と取り戻すことはできないことから、責任感を持って日々の観察と適切な栽培管理に努めました。

その後、さとうきびの原原種生産に関わる網室・検定チームに異動し、さとうきびの調苗(苗づくり)、肉眼・PCR 検定、植付、収穫、機械整備等、多くの業務を経験しました。現在は、さとうきびの品質検査業務を主に担当しており、原原種の「形態調査」と「発芽調査」を行っています。

さとうきびは、栄養繁殖性であるため種苗の増殖率が低いうえに、ウイルス病、細菌病などの病害が種苗とともに広まり、被害を拡大させやすい性質を持っています。一般農家の安定生産を支えるため、さとうきびの種苗生産は原原種(沖縄・鹿児島農場)→原種(県)→採種(市町村、農業団体)の 3 段階で行われています。



さとうきびの場内用セル苗生産

沖縄農場では、育種機関から導入した品種を、3 段階で増殖し、健全無病な原原種として県に

供給しています。

どの業務も天候等の影響で計画どおりにいかないことが多く、自然相手の仕事の難しさを痛感する日々です。特に沖縄は台風による影響が大きく、台風に備えた栽培管理、施設の対策が重要となります。台風襲来後は、散乱した資材や木の枝などの後片付けや、きびおこしを台風あけの晴天の中おこなっています。

### 今後の抱負

さとうきびの品種について、特性などを説明できるようになりたいです。例えば、農研機構の育成品種である「Ni27」は、やや太茎の高糖性であり、夏植えで需要のある品種です。農場に訪れる農家さんの方が私より品種や栽培について詳しいことも多く、まだまだ教えてもらうことばかりなので、さとうきびの生産に携わる職員として、少しでも有用な情報を伝えられるようになりたいです。また、病害や機械関係についても、技術を習得したいと思っています。

## …いま何してる?… 上北：中根 麻冴美 調査員



抜き取り作業の合間に

上北農場業務部の中根です。平成30年4月に採用され、同年7月から現在まで上北農場に勤務しています。

上北農場は、空気や水がきれいで自然豊かな青森県七戸町にあります。周辺地域には温泉が多くあり、海産物や農産物などおいしい物がたくさんあります。私は特にホタテが好きです。冬になると、農場周辺は積雪が最大150cm程度にもなります（赴任した当初は雪の多さに驚きました…）。

上北農場では、ばれいしょの原原種生産及び遺伝資源保存業務（りんごやくるみ等）を行っています。国内の種ばれいしょは段階的に増殖

されており（原原種→原種→採種）、種苗管理センターは大元となる原原種の生産を行っています。

### 現在の業務について

私は現在、原原種生産・検定チームに所属し、主に病害の検定業務を担当しています。検定業務は、健全かつ無病な原原種を生産・配布するために重要な業務です。具体的には、ばれいしょ栽培期間中にウィルス病等の罹病株や、品種特性を現していない異常株の「抜き取り」を行っています。抜き取り期間は植付けた塊茎が萌芽してから収穫前に地上部を刈取るまでの僅か3か月あまりの期間ですが、原原種生産にとっては、重要な期間でもあります。冬期には各種病



ハーベスタのオペレート作業

害について、ELISA や PCR を用いて検査を行っています。大学生の頃はラボワークが中心だったので、最初は広大なほ場を歩くだけで良かったですでしたが、今では体力もつき、フィールドワークが楽しくなりました。抜取り技術は一朝一夕には身につきません。先輩職員の方々に着目するポイントを聞き、各種病障害や品種特性を目で覚えながら、経験を積んでいます。また、栽培管理などの生産業務を中心にを行う職員との連携も大切です。病虫害防除に関する情報共有をしっかりとするよう、努めています。職場は気さくな方が多く、忌憚なく意見を交わすことができ、明るくアットホームな雰囲気、日々仕事をしています。

### 今後の抱負

現在の業務に携わるようになって、丸2年になります。病害検定に係る業務については、計画から主体的に考えることも増えました。赴任当初から、フィールドワークとラボワーク両方において、生きた知識に富んだ上司や先輩職員に教わることができ、感謝しています。これからは、学んだ知識をアウトプットして後輩職員に伝え、自分自身も理解を深めていきたいです。抜取りや検査技術をさらに向上させていくとともに、検定業務を行う中での気づきを課題提起し、原原種の品質向上につなげていくことも重要だと考えています。また、農業機械の運転や生産計画、栽培管理などの生産業務にも携わり、トラクターで真っ直ぐ耕起作業ができるようになりたいです。あわせて種苗生産業務全体について、学んでいきたいです。

## …いま何してる?… 西日本：山田 優生 調査員



ニューギニアインパチェンスの特性調査

西日本農場業務第2部第2チームの山田です。平成30年の12月に種苗管理センターに採用となり、4か月間本所の栽培試験課で勤務したのち、平成31年4月に現在の部署に配属となりました。

### 西日本農場について

岡山県笠岡市に農場があり、美観地区のある倉敷市や後樂園のある岡山市など近辺に観光地が多いです。

農場には3つの業務部があり、業務第1部が種苗検査業務と遺伝資源保存業務、業務第2部と第3部が品種登録のための栽培試験業務をそれぞれ担当しています。

### 担当業務について

昨年は栽培試験の実務担当者として、スベリヒユ種の栽培試験を担当し、現在はニューギニアインパチェンス類の栽培試験を担当しています。担当植物は初めて触れる植物種ばかりなので、日々先輩方にご指導をいただきながら植物と業務について勉強しています。

第2チームでは品種登録出願点数の多い植物種も扱っており、そのような植物の特性調査

をする際はチーム全体で業務にあたります。その場合には業務の割り振りをしたり進捗状況を確認したりと、協力して仕事をしなければならぬため、積極的にコミュニケーションをとる必要があります。特性調査のピークの時期はいつも以上に忙しくなりますが、チームで仕事をするのは楽しく、学ぶことも非常に多いです。

私自身はまだ不慣れな部分が多いので、少しでもミスが減るように日々気を付けています。また、業務の割り振りを考えたり、今後の見通しを立てるなど、どのようにすれば最も円滑に業務が進められるかを考えるように努めています。

植物の調査時期以外では時間的に余裕ができる時もありますが、その時も他に何かできることや今後のためにしておかなければならないことがないかを常に考えて日々行動するようにしています。

### 今後の抱負について

西日本農場に赴任して、1年経過しました。植物の栽培技術の習得には経験を要するので、まずは日々担当植物を観察し、薬散や水管理をどのようにすればよいのか見通すことができるようになりたいと考えています。そのために、疑問に思ったことを先輩方に質問したり、文献などで調べたりして植物の栽培に関する知識を深めていきたいと思っています。

また、4月から第2チームに新たに2人のメンバーが加わりました。昨年は上司や先輩方から指示を受けることばかりでしたが、今年は私から指示を出さなくてはならない機会が少しずつ多くなってきていると感じています。そのため指示を出す際には分かりやすく伝えるために、要点をまとめて伝達できるようになりたいと考えています。

## …いま何してる?… 嬬恋：高木 千夏 調査員



MnT 収穫

嬬恋農場業務部 MnT (ミニチューバー) 生産チームの高木です。平成 30 年 4 月に採用となり、同年 7 月から現在まで嬬恋農場に勤務しています。嬬恋農場は標高約 1200m に位置するため、夏でも涼しく過ごしやすいのが特徴です。また農場の周囲には、村の特産品であるキャベ

ツ畑が広がっていて、近くには鹿沢温泉、万座温泉、草津温泉など有名な温泉が沢山あり、キャンプ場やスキー場などのレジャー施設も充実していて、大変自然環境に恵まれています。

### 現在の業務

私は平成 31 年 4 月から MnT 生産チームに配属となり、培養苗の増殖を担当するとともにミニチューバー (MnT) の生産全般に渡る業務に携わっています。ミニチューバーは培養器内で増殖をしたウイルスフリーの苗を、病害虫から隔離された生産施設のバーミキュライト培地に植え、養液で栽培を行い、10g 以上の塊茎から順次収穫を行っています。種苗管理センターではウイルスフリーの培養苗→ミニチューバー→基本種→原原種という段階で増殖を行

っているため、ミニチューバーは国内の種いも増殖の最上流の塊茎になります。ばれいしょは栄養繁殖性であり、増殖率が10倍程度と低いです。そのため自分が生育に携わったミニチューバーが元となり、何年もかけ種苗として国内に流通していくことを考えると、やりがいを感じるとともに、責任感を持ちながら業務に取り組んでいます。



培養作業

養液栽培では、ほ場の栽培とは異なる点が多くあり、日々学びながら業務を進めています。培養の段階で苗は10cm程の大きさですが、

生産施設内での栽培中には、地上部が自分の背丈を超えるほどに成長します。また収穫期間は長いものでは4か月にわたり、最盛期には週に2回収穫を行っています。わずか数日でも塊茎が大きくなっているのが確認でき、植物の生命力に驚きました。また地下部を見ることができ、品種によって塊茎の付き方、ストロンの伸ばし方などに特徴があることがわかり、とても興味深いです。

### 今後の抱負

ミニチューバー生産に携わり、今年で2年目となりました。種苗管理センターでミニチューバー生産を担当しているのは北海道中央農場と婦恋農場の2場だけなので、貴重な経験をしています。今年度から培養を任せられ、作業をスムーズに行うには計画性をもって進めることが重要であることや、自分の知識や経験不足を痛感している次第です。まずは先輩職員のご指導のもと、日々の業務を確実にやり、知識や技術の習得に努めたいと思います。また、今後は様々な経験を積み農研機構に貢献できるような人材になりたいです



## トピックス

### ◆ 新型コロナウイルス対策（北海道中央農場）

本年1月16日に国内で初めて新型コロナウイルスの感染が確認されてから、全国にその被害が拡がり、4月16日には全国に特別措置法に基づく緊急事態宣言が発出され、首都圏や関西圏に加え、北海道などの感染者の多い地域は特定警戒都道府県に指定された。当場所のある北海道も1月28日に感染が確認された以降、徐々に感染者が増え始め、2月28日に北海道独自の緊急事態宣言が発出された。自粛効果により5月中旬以降は感染者も徐々に減少していき、5月25日には緊急事態宣言は解除されたものの、感染者は少数ながら毎日報告されている。8月10日現在、北海道の感染者は1,545名となっており、うち当場所が所在する石狩振興局管内では1,141名（全道の約74%）の感染者が報告されている。特に、当場所に隣接している札幌市に感染者が集中している関係で、場内に感染者を出さないよう様々な対策を講じ、職員にも周知徹底してきたところである。

農研機構本部及びセンター本所からの指示のもと、マスクの着用や消毒液の設置、換気を良くすること、不要不急の外出を控えることに加え、「3密」を避けるため、朝礼場所の変更、場内会議の延期（中止）、休憩時間と休憩室の分散、執務室の机を離すとともに、机間にはビニールカーテンを設置するなどの対策を講じた。更に、感染者の多い札幌市に在住している契約職員含む14名の職員には自宅待機を命じ、種苗生産業務以外の担当者には出勤率7割削減の業務命令とした。



出勤制限とビニールカーテン

他方、4～5月は種苗生産業務にとっては繁忙期にあたり、毎年この時期にばれいしょの植付けが始まる。このコロナ禍のなか、上述のとおり札幌在住者が出勤できなくなったことを受けて、残った職員で効率的、かつ効果的に業務を実施するため各作業計画を大幅に見直すこととした。

当センターが実施するばれいしょ原原種の生産・配布業務は、種いもの大元となる最上流に位置し、当場所はその出発点となる新品種の導入とミニチューバー生産も併せて担当している。ばれ

いしょは一般的に病害虫に弱い作物である上に、種子繁殖ではなく栄養体で増やすため増殖率が著しく低い。そのため、従前から種いもの増殖は、原原種→原種→採種の三段階増殖体系で時間をかけて増やしている。国民生活にとって欠かすことが出来ないのは食料であり、北海道は国内で一番大きな食料生産基地といわれている。その中であって、ばれいしょは国内生産量の大部分を北海道が担っている状況にある。今回のコロナ禍の状況下でも日本農業を守る観点からばれいしょ原原種の安定生産と供給を途絶えることなく継続するよう北海道庁からも要請されたところである。

このため、コロナ禍の状況下、健全無病なばれいしょ原原種の生産・配布に向け、職員一丸となって春作業に取り組んだ。少なくなった人員を補うため場内のチームを横断的に配置し、優先順位を付けて業務を実施することとした。5月上旬、ほ場の準備も整い、植付けを開始したいところであったが、天候不順によりほ場に入れない日が続いた。担当職員にも焦りの色が見え始めたところであったが、焦りは事故を誘発する可能性もあるので、まずは基本原則に立ち返ることに専念した。植付け作業は天候に左右されるが、



ばれいしょの植付

るが、天気予報とほ場の状況を毎日確認し、植付け可能と判断した場合は休日にも植付け作業を実施したことで、平年より3日遅れの5月20日に原原種の植付けを終了、調査用種苗は5月22日に終了した。平年より若干遅れたものの、今回の事態により作業計画を見直したなかで、予定より早く無事に終了させることができたのは、職員がこの状況をよく理解し、互いに協力し合いながら、大きな使命の達成に向け、一つ一つの作業を确实、丁寧に実施してきたことにある。植付け終了後は、ミニチューバー生産に職員を集中し、順化、定植と順次作業を進めている。

今回のこのコロナ禍において、緊急事態対応を行ってきたが課題も残った。今回の事態で札幌在住者が出勤できないことで大型農業機械のオペレーター不足が問題となった。ばれいしょの植付けには耕起・砕土・整地、作畦・施肥、植付けと各作業に複数のオペレーターを配置してきたところであり、そのオペレーター業務を行うには数多くの技能の経験値が必要になる。今回は熟練のオペレーターが一人しかいない状況であったため、不慣れな職員にオペレーター業務を対応してもらったが、作業効率は落ちる結果となり、多くの時間を要することになった。今回の件で人材育成の重要性を再認識したところであり、今後の改善につなげていきたいと考えている。

最後に、今回の新型コロナウイルスについては、国内の緊急事態は解除されたものの、まだ予断を許す状況ではない。今暫くは各種対策を継続していくことになる。少しでも早くこの状況が終息し、日常の生活に戻れることを切に願っている。

(北海道中央農場長 大堀英幹)

## ◆ UPOV 第 54 回野菜作業部会 (TWV) に参加して ～電子会議システム利用 (新型コロナウイルス感染防止対策)～

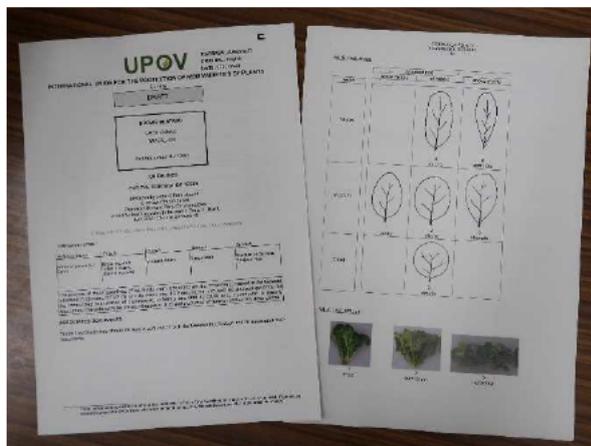
2020 年 5 月 11 日～15 日の 5 日間、UPOV (植物新品種保護に関する国際同盟: The International Union for the Protection of New Varieties of Plants) の第 54 回野菜作業部会 (TWV: Technical Working Party for Vegetables) が開催されましたのでその概要を紹介いたします。

今回の TWV は当初ブラジルの首都ブラジリアにおいて同日程にて開催予定でしたが、新型コロナウイルス (COVID-19) の世界的な大流行により各国が感染拡大防止策をとる中、通常の会議の開催が難しい状況となったことから、3 月末に急遽世界知的所有権機関 (WIPO) の提供する電子会議システム (Cisco Webex) を利用して会議を開催することとなりました。

今回の TWV には、30 の国や国際機関から 80 名が参加し、日本からは農林水産省知的財産課種苗室の堀口次席審査官、松本次席審査官、大野審査官が参加し、種苗管理センターから私と門田主任調査員の計 5 名が参加しました。

会議開始時間が日本時間午後 5 時からという制約があったため、種苗管理センターが担当する審査基準案 (カラシナ、ケール) に関係した検討に絞って会議に参加しました。

カラシナについては本年審査基準案が UPOV で採択される見込みとなり、ケールについては一部形質の評価方法及び標準品種の設定について関心国と調整する必要が生じたことから検討を継続することとなりました。



カラシナの TG (ドラフト)



ケールの栽培試験

次回の TWV は、2021 年 5 月 3 日～7 日にトルコのアンタルヤで開催される予定です。

今年は電子会議になったことにより、参加国及び参加者が大幅に増えるというメリットがありました。一方、参加者の表情を見られないため発言者の微妙なニュアンスを理解しづらく、また各議題の合間の休息時間にコミュニケーションが取れないことから各国の情報収集ができなかった等のデメリットもあり、一堂に会して会議をすることの有益性を改めて実感したところです。



(栽培試験課 西川隆之)

# ギャラリー

◆農場便り【孀恋農場】(本文3ページ)

孀恋農場の  
ばれいしょ原原種ほ場



ミニチューバーの生産施設



ミニチューバーの養液栽培

## <編集後記>

今年は世界的に新型コロナウイルスの被害が拡大し、日本でも緊急事態宣言が発令され、会議の開催や出張の自粛、在宅勤務の実施、出勤制限等が行われました。各事業場ではテレワークを始め新しい仕事のやり方を求められ、それぞれ業務の使命を達成するため様々な工夫をしてきました。是非、この経験を生かし、新しい生活様式を取り入れ、新しい働き方スタイルを目指し、ピンチをチャンスに変えていきましょう。(種苗戦略室)

(編集・発行) 農研機構 種苗管理センター 種苗戦略室  
茨城県つくば市藤本2-2  
TEL 029-838-6587 FAX 029-838-6583  
ncss-info@naro.affrc.go.jp

<https://www.naro.affrc.go.jp/laboratory/ncss/>



<令和2年9月>